

## 「平和学習 熊本の戦争遺跡・被害・加害について理解する ～松橋空襲からみた加害と被害、進駐軍の見た熊本～」講演資料

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷和生

### 1 はじめに ～戦後77年の諸相～

- 戦後世代としての「私の視点」～近現代考古学との出会い～
- 戦争遺跡保存全国ネットワーク全国運営委員、空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会世話人、熊本県内「戦争遺産フォーラムくまもと」事務局
- 菊池恵楓園ボランティアガイド活動、くまもと戦争と平和のミュージアム設立準備会

### 2 熊本の戦争遺跡・遺産 MAP『くまもと戦争遺産ガイドマップ』、『大浜飛行場 II』他

#### (1) 戦争遺跡とは

- 全国の戦争遺跡は「約50,000」件、指定登録は「342件」件 前年319件 2022年8月現在
- 熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」
- くまもとの戦争遺産『内の一覧表には「224件」を精査し記載
- 熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件。



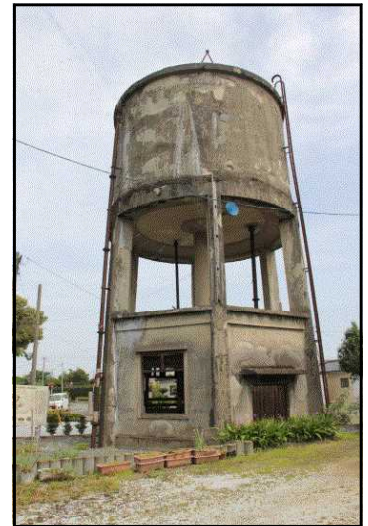
宇城市の戦争遺跡「永代橋梁」

#### (2) 西南戦争期の指定等

西南戦争遺跡群(国指定、熊本市・玉東町)、明德官軍墓地(熊本市)、七本官軍墓地(熊本市)、花岡山陸軍埋葬地(熊本市)、旧輜重兵六聯隊衛兵所(熊本市)、有栖川の宮御督戦の地(玉東町)、篠原国幹戦傷の地(玉東町)、城の原官軍墓地(南関町)、肥猪町官軍墓地(南関町)、陣内官軍墓地(水俣市)、下岩官軍墓地(和水町)、高瀬官軍墓地(玉名市)、田浦官軍墓地(芦北町)、峰崎官軍墓地(芦北町)の計14件

#### (3) 太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」(陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財)、「永山の掩体壕」(陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物)の2件。また、合志市の「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を進めており、完了後に合志市指定文化財となる予定である。



菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」菊池飛行場

#### (4) 熊本の「戦争の歴史」をたどる

～熊本に残された戦争の傷跡「七大特徴」～

- ①軍都熊本市の軍事施設  
～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で三番目に多い陸海軍飛行場  
～正規飛行場、本土決戦に向けての特攻秘匿飛行場～
- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所  
～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所と学校工場・地下工場  
～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～

#### ⑤本土決戦に向けての天草地区砲台、震洋等の特攻艇基地と兵站基地としての人吉地区の飛行場・地下工場・地下壕群

- 2018年8月1日開館 錦町立「人吉海軍航空基地資料館」～山の中の海軍の町にしきひみつ基地ミュージアム
- 意見書提示(同年9月)回答なし。新たな「靖国史観」への危惧
- 戦争や戦争遺跡を美化したり、集客目的に利用する「戦跡の観光地化・商品化」「歴史事実の歪曲・矮小化」ではないか。不十分な展示説明
- 実機「海軍九三式中等練習機」実物大復元機の意味するもの 強い違和感
- 何でもありの「地域づくり」、文化財活用の誤用、行政がからむ「プチ遊就館」
- 「学ぶ旅」観光のあり方、戦争遺跡の学びの本質とは

## ⑥県内各地に残る空襲・戦災の「被害の歴史」

## ⑦朝鮮人や中国人、連合国軍俘虜労働者、敵機捕獲搭乗員への「加害の歴史」

### 3 空襲被害と加害の実相

※啓発リーフレット『M76焼夷弾と熊本空襲』、『空襲下の熊本』

#### (1) 空襲下の熊本

□熊本県下への空襲全史、各要件での再構成が必要

#### (2) 第1回 熊本大空襲

□昭和20年7月1日深夜 B29攻撃154機  
□全国中小都市への戦略爆撃（全国160中小都市の16番目の人口）

#### (3) 第2回 熊本大空襲

□昭和20年8月10日午前 B24・B25・A20・A26・P47・P38  
□継続した都市空襲としてだけではなく、沖縄移駐の陸軍航空群による「九州上陸作戦（オリンピック作戦）」前哨戦の位置づけ

#### ①M76落下傘付き500ポンド大型焼夷弾

□ナバーム弾を含め多様な焼夷弾構成、徹底した攻撃  
□ヒロシマ・ナガサキ「原爆」投下で帰結する爆撃思想

#### ②昭和20年8月10日眼下の熊本市街地、関わる証言の“継承”

□沖縄移駐の第5航空団第3爆撃群団の各爆撃機による攻撃  
□空襲に関わる残された証言の掘り起こしとその検証

#### (4) 松橋空襲の実相

##### ①「松橋空襲とは」何か

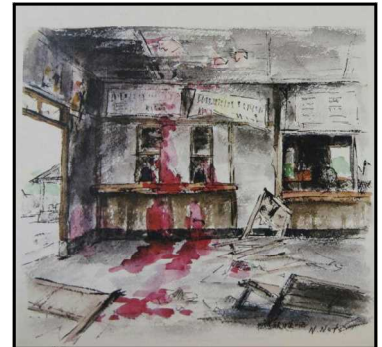
□熊本での「地方空襲」を改めて「見つめ直す」  
□戦争実相での鉄道等の「インフラ攻撃」のわかりやすい姿  
□さらに「本渡空襲と天草海軍航空隊」調査へと発展

##### ②戦争遺跡「永代橋梁」の姿

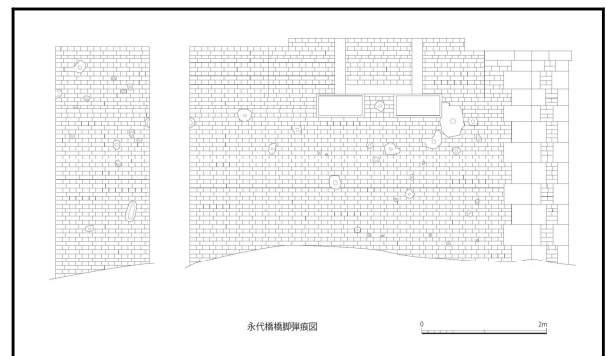
□下部構造（躯体）は、橋脚2基・橋台2基で構成  
□上部構造は、桁連数三連の「三径間単純鋼桁（ガーダー）橋」、橋長40.74mを計測  
□九州鉄道時代の貴重な鉄道・近代化遺産であり、全体構造等の継続調査が必要  
□橋梁第一橋脚への「爆弾痕跡と機銃弾跡」の調査・測量



1945年8月10日米軍機による  
市立商工学校への空襲



松橋駅の惨劇  
昭和20年7月27日の空襲  
様子 夏目信彦氏著『記憶のなかの色紙』より



左：第1番橋脚西面の機銃弾・弾痕状況

右：第1橋脚西（右図）・南（左図）の爆弾・機銃弾痕跡図

#### ③墜落したB25と5名の搭乗員

□墜落機体 North American 「B-25」 Mitchells J型機  
□第5爆撃機集団 第345爆撃機群団 第498戦隊所属機  
□機体型番：4-31300 機体に通称は「エアパッチ」  
□墜落日：1945年8月7日  
□墜落地：旧鏡村「氷川河口」  
□墜落機搭乗員  
主パイロット Robert G. Neal大尉 NY Buffalo出身（後列左 ロバート・ニール）  
サブパイロット Louis J. Winiecki, Jr大尉 NY Lancaster出身（後列右 ルイス・ウィニッキ）



航法士 Richard S.Lane 大尉 NJ Ridgewood出身 (前列左 リチャード・レーン)  
 機関士 Robert W.Goulet 軍曹 NY出身 (前列中 ロバート・グワレット)  
 通信士 William Cohen 軍曹 NY New York出身 (前列右 ウィリアム・コーエン)



右：1945年8月7日、  
氷川に墜落したB25  
機の機長・搭乗員  
左：沖縄伊江島基地か  
ら離陸するB25機  
工藤洋三氏提供

#### ④「今だから話せる」「もう話してもよからう」という戦争証言

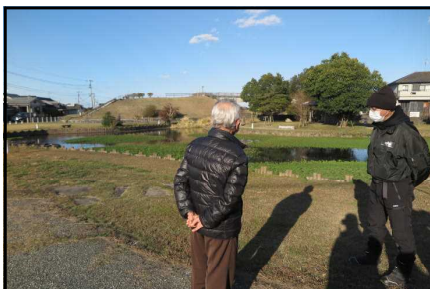
- 古賀昭代さん(85歳・当時国民学校4年生)の証言  
「若い米兵達は、後ろ手に縛られ引っ張られていた」「国防婦人会の約20人が、もんぺに鉢巻きを締め、薙刀を持つ姿に圧倒された」
- 塚本 太さん(82歳・当時国民学校2年生)の証言  
「米兵と対峙した父」「墜落時の米兵と住民」「芝口集落を歩く、5人の米兵・荷だを目撃」

#### ⑤米軍機が遺棄された「鏡が池」とは

- 島田幹雄さん(83歳・当時国民学校2年生)の証言  
「戦後、学校で“決して話してはならない”とのかん口令がしかれた」
- 藤山俊一さん(89歳・当時国民学校2年生)の証言  
「池には飛行機主翼先端部が2基、大型の尾翼も投棄された」「約80cm長のベルトに繋がったままの機銃弾を、遊びでいて見つけた」 戦後、薬きょうを大事に保管

#### ⑥鏡が池には、敗戦後に日本軍武器も廃棄

- 横井 稔さん(90歳・当時国民学校3年生)の証言 「鏡が池から重機で掘り上げる」



左：機体主翼等があった池の場所を確認する島田さんと古牧さん  
 中：鏡ヶ池から藤山さん採集の機銃弾薬莖 6点  
 右：横井さん採集の薬筒等 7点

#### (5) 加害の実相 西部軍第三事件での米兵処刑

- 内地での捕虜飛行士は「一般捕虜」ではなく、戦犯容疑「敵機捕獲搭乗員」
- 総数568人で、無事本国への生還者は303人
- 捕虜は熊本憲兵隊本部で取り調べを受けたのち、福岡西部軍司令部へ列車で連行される。
- 途中、荒木・筑紫駅付近で米軍機による銃撃「西鉄筑紫野駅銃撃事件」(1945年8月8日11時30分)を受け、連行中の憲兵1名が死亡する。幽閉されたのち15日に油山で処刑された。
- 1945年5月頃以降に西部軍司令部に収容された飛行士40～41人は、「日本人市民に対する無差別爆撃の罪」の理由で6月20日(第一事件)、8月10日(第二事件)、8月15日(第三事件)に3回にわたって処刑された。これらの事件を通称「西部軍事件」という。
- 搭乗員斬首事件(GHQ報告書第420号 再審記録第288号)
- 裁判の期間：1948年10月11日～12月29日

#### 4 進駐軍の見た熊本 ※啓発リーフレット『進駐軍の見た熊本』

##### (1) 進駐軍と海兵隊フィルム

##### ①米国海兵隊の熊本への進駐

アジア・太平洋戦争の終結後、我国には連合軍が直ちに駐留し、通称「進駐軍」と称されていた。九州へは9月3日鹿屋地区に、10日には米国第5海兵軍団が佐世保に進駐した。その後に当軍団は佐世保に本部を置き、九州各県及び山口県主要都市に進駐した。

熊本には海兵第二師団(師団長ハント少将)第八連隊の二人の将校が、先遣隊として9月28日健軍飛行場に降り立ち、10月5日から12日までに連隊長マックファーランド大佐を長とする本体が進駐を完了した。主力は熊本市北区八景水谷の旧陸軍熊本幼年学校であり、他にも旧陸軍第六師団歩兵第十三聯隊跡他的大江地区旧各聯隊跡に駐留した。その後、駐留部隊は数回交代し兵員数も変化した

が、講話条約発行後も安保条約に基づき駐留を続け、昭和31年10月14日に撤収を開始し、キャンプウッドを米軍が引き渡したの10月14日であった。

熊本での米軍の駐留期間は実に11年であった。

## ②海兵隊フィルムとスチール写真

1995年羽仁進代表が主催する市民団体「平和博物館を創る会」では、戦後に米国海兵隊が撮影した長崎被爆惨劇の映像を入手しようと「10フィート運動」を全国に広げ、その成果として米国国立公文書館より16ミリカラーフィルム「1万6661フィート（3.25km）・約5時間・1121カット」の画像を入手した。ただ、この映像には音声は付いておらず、入手の経緯等からフィルムに関わる米軍資料の調査分析はなされていなかった。

その後、NCM長崎ケーブルメディアデレクターの吉村陽夫氏は、長崎原爆被害映像や長崎近郊映像を独自に分析して、その概要を「ながさき被爆記録全集 海兵隊フィルム」として番組で継続して紹介している。特に熊本関係映像は「**ながさき被爆記録全集 第11回長崎県外の映像など**」で放映された。以下「**長崎ケーブルメディア映像**」と略す。

また、東京都の靖国神社九段下「昭和館」でも独自に、米国公文書館より戦後映像を入手し、熊本関係映像については「**熊本の街並み風景 その他**」として映像を紹介している。ただ、この映像に関する調査分析はなされていない。以下「**昭和館映像**」と略す。

さらに、全国の空襲被害状況等をまとめた**戦略爆撃調査団**による調査内容は『**戦後日本の原風景 本土最前線・九州**』等に収録されているが、熊本県関係映像は確認されていない。

そして今回紹介する**スチール写真**は、米国国立公文書館に所蔵されている長崎原爆資料調査の過程で、「Nagasaki」銘と記載がなされているが「熊本関連」と想定される写真資料群である。本写真の所蔵・調査は「**公益財団法人 長崎平和推進協会 写真調査部会**」が行っており、その総数は約4,000点とされる。

くまもと戦跡ネットでは、これまで敗戦前後の「**混乱と苦渋にみちた空白の歴史**」の実相解明に向けて、残された戦争遺跡や日本側証言、米軍資料を継続して調査している。その概要は2021年3月に啓発リーフレット『**進駐軍が見た熊本**』として公開している。

本スチール写真は、本年5月9日同写真調査部会から本会が提供を受けたもので、内訳は、天草海軍航空隊・富岡水尻砲台他：21枚、菊池飛行場：26枚、菊池恵楓園：10枚、健軍（熊本）飛行場：38枚、三菱重工業熊本航空機製作所：8枚、三角港爆弾等投棄・米兵阿蘇登山・熊本駅・天徳園・熊本市内各所他：99枚の「**計202枚**」である。また本写真群の撮影された期日は、**1945（昭和20）年10月14日～1946年3月18日までの期間**である。

なお、戦後撮影の米軍写真に関連する熊本県内資料としては、熊本日日新聞社に「故 野田 衛氏（熊本市出身・ジャーナリスト）から「1985（昭和60）年に約240点」の寄贈を受けた情報ライブラリー所属資料がある。一部は特集「米軍記録 占領下の熊本 克明に」での紙面紹介（昭和60年7月12日～8月15日・29回）、展示会「終戦40年 熊本展」（同1985年8月13日～19日・鶴屋百貨店ホール）で公開されたが、多くは「未公開」状態であった。

一覧表内の「占○」は紙面公開写真番号、「野○」は野田氏寄贈の米軍記録写真番号である。第一弾公開資料103枚中で**新発見写真は90枚**、全202枚中では**同179枚**である。

## ③ 撮影部隊の概要

この撮影部隊は、**米海兵隊第2海兵師団ノーマン・ハッチ少佐指揮下の「スチール写真班（2D MAR DIV PHOTO SELECTION）」と「映像班（2D MAR DIV MOVIE SELECTION）」の複数の撮影班である。** ※参考1（熊10-3）

撮影期日は1945年9月23日～11月10日で、部隊は長崎港に上陸後、市内各所で原爆被災状況を撮影しつつ長崎近辺（大村・島原他）へも出向いている。その後旧日本国有鉄道を利用し大牟田を経て、熊本へ到着している。

ムービー映像撮影前には既存様式のキャプションボードが撮影されて、そこには撮影者、日付（date time）、最下段には撮影班「**2D MAR DIV**」等を記載、現地情報がそのまま記載されている。但し、天草下島を撮影した部隊は調査中である。

一方、写真資料は現地撮影後で本国帰国後で整理されている。専用パンチカード方式台詞に該当写真を貼り付け、タイプ打ちして収納している。台紙には通し番号例「137337」等が、手書き文字・番号例「127-GW-1542」等が記載されており、これは米国国立公文書館の分類である。（RG127-GW, Photographs of World War II and Post World War II Marine Corps Activities, ca. 1939-58）

## ④ 写真・フィルムの歴史的意義・価値

長崎で公開されている映像の大部分は、長崎原爆投下後最も早い45日目の被爆初カラーフィルムである。ただ、今回紹介するのは、それに付随し収録時間は短い、敗戦後の熊本を記録した貴重なスチール写真と16ミリカラーフィルムである。

以下4項目で**写真資料の歴史的意義・価値**を示す。

ア 同時に撮影した**16ミリカラーフィルムと併せ「戦後熊本の敗戦状況」を記録した貴重な写真資料**の発見である。

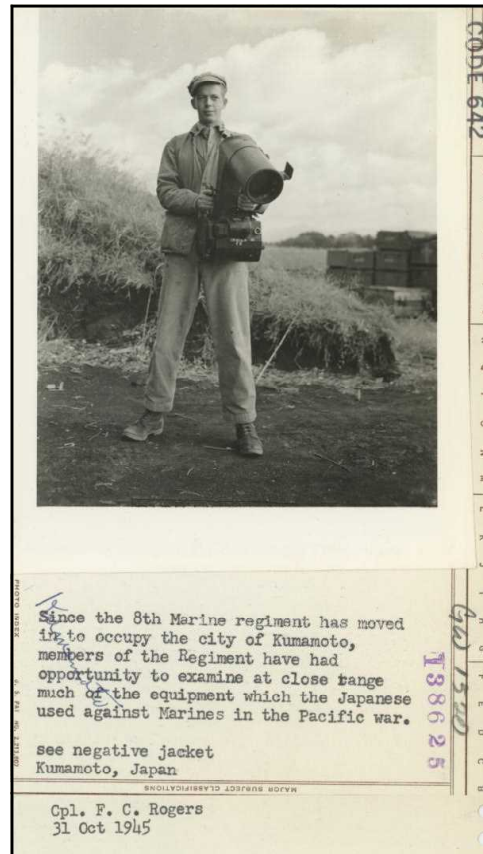
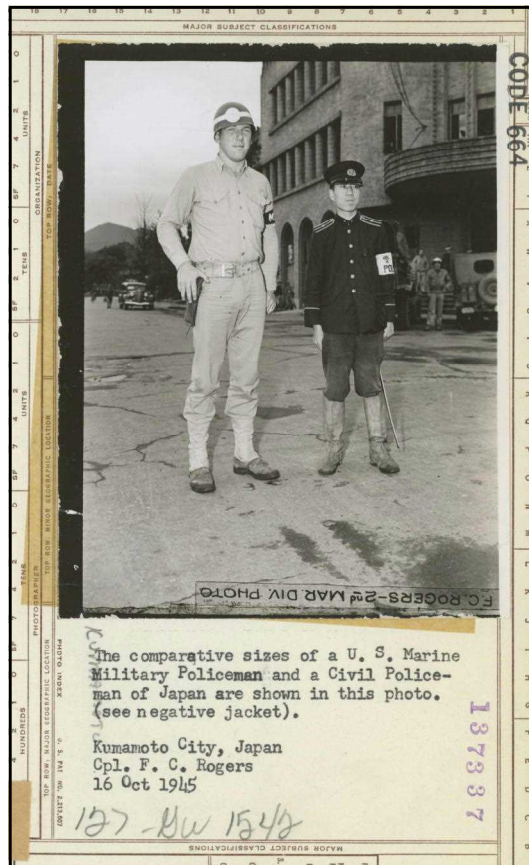
イ これまでは全く確認できていなかった「**天草海軍航空隊・富岡水尻砲台等**」接収の初資料で



映像1「健軍飛行場で接収を受ける  
“飛龍” 長崎ケーブルメディア映像より



- ある。天草下島地区については、島原半島から渡海し接收した接收等状況が想定できる。
- ウ 既公開資料として「菊池飛行場・菊池恵楓園・健軍飛行場・三菱重工業熊本航空機製作所・三角港爆弾等投棄・市内航空工場等」が部分的に確認されていた。本資料はさらなる空襲被害状況、施設の接收状況、入所者状況、飛行機・武器類の遺棄等での新たな追加写真である。
- エ 進駐米兵の「阿蘇への慰安旅行」を初め、米軍の駐留状況を知る新たな資料である。



参考 1 (熊 10-3)

「熊本市公会堂の米兵MPと日本人巡査」

進駐軍軍政部のおかれた熊本市公会堂（現市民会館）前で交通整理中の日本警官・オメダアラタ氏と米MPのハンター氏である。

撮影は「F.C.Rogers」、所属は「2nd MAR. DIV. PHOTO」班

写真 1 (熊 10-5) 第 2 海兵師団  
での原爆被害調査班員

## (2) 天草海軍航空隊・富岡水尻砲台 他

### ①天草海軍航空隊基地跡

天草海軍航空隊は天草市佐伊津に所在する。「佐伊津・御領」飛行場の別称があり、水上機専用の飛行場である。旧通信省天草地方航空機乗員養成所（海軍系）として、開所準備が完了したところで、全施設を海軍が接收。昭和19年3月に第十二連合航空隊博多海軍航空隊天草分遣隊として当初は整備教育隊として発足したが、その後は水上機操縦の教育も行った。昭和17年頃より地元中学生や住民の勤労動員、徴用された朝鮮の人々も建設に投入された。

その後昭和20年3月1日、天草海軍航空隊として独立、第5航空艦隊第12連合航空戦隊に編入。保有機は米軍への引渡目録によれば九三式水上中間練習機36機、九四式水上偵察機3機、九五式水上偵察機15機、零式水上観測機7機、二式水上戦闘機3機の計64機であった。5月5日練習航空隊の指定を解き、第5航空艦隊第12航空戦隊の所属となった。

昭和20年の沖縄戦においては第一次攻撃隊が5月24日2機、第二次攻撃隊が6月21日に5機、7月3日に1機の零式水上観測機での特攻作戦を実施し14人が戦死されている。

本部跡の高台には、沖縄作戦で亡くなった隊員の「特攻慰霊碑」が戦後まもなく結成された「天空会」により、1973（昭和48）年に建立されている。

### ②富岡水尻砲台

富岡半島の北端の四季咲岬公園・富岡灯台に向かう狭い道を海まで進むと、道路横の民家庭先に隠れるようにしてコンクリート製の海軍海面砲台が現れる。この地富岡は、近世以降天領支配の中心となった土地で、富岡城の築城をはじめ、その要害の地形から、戦争中は海軍砲台指揮本部・水尻海面砲台・元袋震洋基地・防空監視部隊（甲・特設見張所）と陸上守備の独歩第七五七大隊が配

置され、お互いに有機的に連動要地防衛を行っていた。

1号砲台はコンクリート敷設で四十五口径十一年式十二糎（センチ）砲が1門設置され、天井部に砲設置時の鉄輪3個が残され、奥右側面には出入り口も設けられている。

2号砲台はさらに20m程上がった崖面に素掘りで壕内部を松材で補強して設置された。その中間地点には弾薬庫と兵器庫が同様の構造で、L型に屈曲させ、壕が掘削されたが、現況は痕跡も残されていない。

その当時の事をよく知る1号砲台横の住人の故松本高八さんは「砲は沖の船から小舟に乗せて、付近の住民総掛かりで陸にあげた。終戦になって、進駐軍が来て、ダイナマイトを仕掛けて爆破しにこらした。上の砲は一発で壕ごとひしゃげてしまったばってん、下の砲は壊れんじやったけん、2回目は砲にダイナマイトを巻き付けて爆破させらした」と証言された。

2号砲台の上位の畑地は観測用の測距儀と対空用の25<sup>mm</sup>機関銃も上段の平場に設置され、砲員60名が寄宿する三角兵舎も付近の道沿いに造営された。記録では第一〇三分隊白庄司清少尉部隊と想定される。

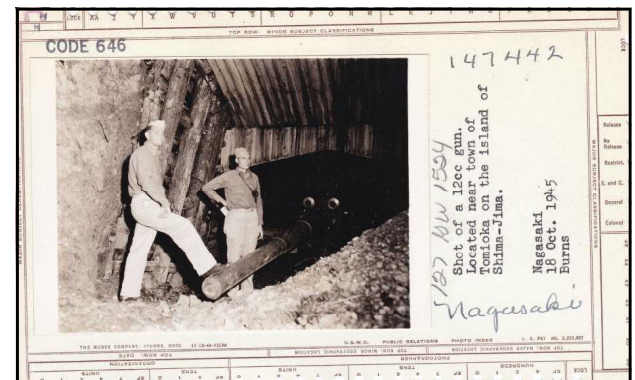
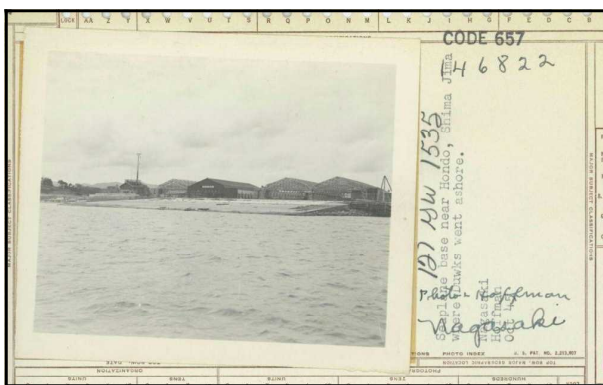
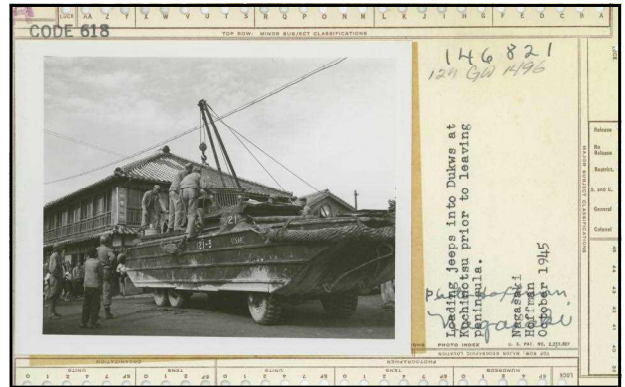
### ③撮影概要と接収状況

本項撮影資料21枚の内訳は、本渡町内2枚、天草海軍航空隊11枚、富岡水尻砲台4枚、鬼池・四十七糎砲各1枚である。ただし写真2・3（天-1・2）は、天草下島渡海前の長崎県南島原市口之津町での撮影である。

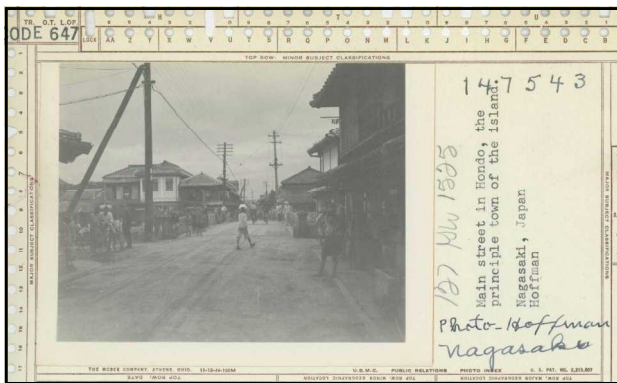
撮影された期日は、1945年10月18日である。

天草海軍航空隊に関しては、写真4（天-3）は天草海軍航空隊施設の全景を写した初めての写真で、しかも海からの貴重なカットである。現存するスリップ状況、格納庫4棟の配置と併せ前線指揮所構造等も理解できる。写真5（天-5）の格納庫内への零式水上観測機接収前状況写真に代表される様に、これら飛行機部品等接収前状況の一連写真は貴重である。アジア歴史資料センター蔵『天草海軍航空隊 引渡目録』との突き合わせ作業で、一連の米軍接収作業状況が想定できる。

また、本土決戦のため設置し、一部が現存する「富岡水尻砲台」関連写真・写真6・7（天-9～12）は、地元での過日証言とも整合する。熊本県内で来たるべき本土決戦準備に向け、海峡封鎖を目的とした、平射海面砲台の構造を理解することができる。







- 写真2 島原口之津駅前での海兵隊DUKWS
- 写真3 林田旅館前のDUKWSと搭載のジープ
- 写真4 天草海軍航空隊基地の海からの全景
- 写真5 格納庫収納の零式艦上観測機
- 写真6 富岡水尻1号砲台の全景
- 写真7 富岡水尻2号砲台の米兵と接收様子
- 写真8 天草市本渡の町山口川と本渡橋

写真2(天-1)は、島原鉄道口之津駅前・林田旅館前での撮影で、当時波止場の前でもある。早崎海峡は全4.2km、当時の「機帆船(880<sup>ト</sup>程度)」で、約40分程度で対岸の鬼池港まで達していた。  
 写真3(天-2)は、海兵隊水陸両用車(DUKWS・通称“アヒル”)に、附属の起重機を使い「半島を離れる(渡海前)にジープを搭載」している様子である。  
 口之津歴史民俗資料館、はやしだ商店(旧林田旅館)で当時証言が残されている。

### (3) 菊池飛行場

#### ① 菊池飛行場

菊池飛行場は菊池市花房富の原に所在する。花房・隈府飛行場の別称あり。昭和15年4月開隊し、同年8月大刀洗陸軍航空支隊菊池分隊を設置。同年10月には大刀洗陸軍飛行学校菊池分教所を設置し、後の昭和18年12月には同菊池教育隊に改称。昭和16年1月、第三航空教育隊・西部第九九部隊が移駐し、航空兵教育を実施し、防衛警備も担当。昭和19年4月には陸軍航空通信学校菊池教育隊が開隊し、菊池陸軍病院第一飛行集団に所属し、菊池気象観測所を配置。

本飛行場は熊本県最大の陸軍基地で、多くの実戦部隊が配置される。昭和16年9月に第一〇六教育飛行連隊(中部第115部隊)～17年4月、昭和17年5月に第一〇三教育飛行連隊(西部第一二七部隊)～18年9月、昭和19年3月には第三教育飛行隊と改称、昭和17年12月に西部軍直協飛行隊(西部第一二七部隊)～18年9月が中心となった。昭和20年5月13日に空襲を受け、多くの建物は焼失したものの、昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、特攻中継基地に変貌する。敗戦時は、第二二九飛行場大隊(靖第一九三八八・昭和20年4月編成)、第五五飛行場中隊(靖第一八四六四・昭和19年4月編成)が配備される。

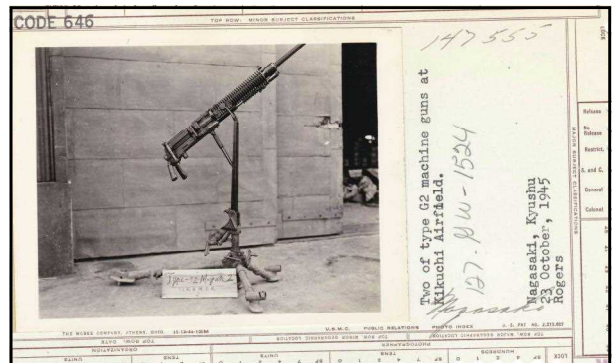
飛行場東側の教育隊・実戦部隊区画には、全高16mの給水塔1基が現存。門柱6、立哨所基礎1、木製大型格納庫基礎1、鉄骨小型格納庫基礎1、大型油脂庫1、小型油倉庫1、兵舎等建物基礎10～15が遺存。また、飛行場西側の通信教育隊区画には風呂場1、便所2、円形防火水槽4、酒保門柱6等が遺存。さらに、台地崖面には多数の防空壕と合わせ、菊池市飛熊には航空支隊菊池分隊の大型格納横穴壕2基、菊池市七城町亀尾にも練習機格納壕が遺存する。

#### ② 撮影概要と接收状況

菊池飛行場では撮影資料26枚の内訳は、戦後開拓風景2枚、各種飛行機5枚、格納庫・油庫等4枚、機銃・爆弾・用品等15枚である。これらのなかで熊日情報ライブラリー所蔵資料と重複す8点をのぞき18枚が初資料である。16<sup>ミ</sup>映像は確認されていない。

撮影された期日は、開拓風景2枚を除き1945年10月22・23・26日である。

写真9(菊-22)は、現存する大型油脂庫の全景である。前面の黒色対空迷彩には機銃弾等の痕跡が明瞭に残り、耐爆性を高める、施設全体への盛土が見える。写真10(菊-25)では「九二式対空機銃」の接收様式が見てとれる。その他250kgを初めとする各種爆弾、物資用落下傘、航空無線等の機器・道具類の接種状況がある。



- 写真9 菊池飛行場管理区画南側の油脂倉庫の全景 ※現存し、民間で利用
- 写真10 接收される格納庫前の陸軍九二式機関銃・対空砲架

#### (4) 菊池楓恵園

##### ①菊池恵楓園の概要

菊池恵楓園は、1909年（明治42年）九州七県連合九州癩（らい）療養所として開設された。1911年（明治44年）に県知事訓令により九州療養所に改称、さらに1941年（昭和16年）に国に移管されると同時に「国立療養所 菊池恵楓園」へと名称をあらため、現在に至っている。菊池恵楓園の総面積はおよそ約18万坪、園の周囲は3.9kmにおよび、日本最大のハンセン病回復者の国立療養所として知られている。

これまで米進駐時での菊池恵楓園16ミリムービー映像が2本確認されている。

##### ②撮影概要と接収状況

菊池恵楓園撮影資料10枚の内訳は、家族舎棟2枚、恵楓学園内部2枚、入所者5枚の計10枚である。撮影された期日は、1945年10月23日と記されるが、映像キャプションから「27日撮影」の可能性が高い。

写真11・12（楓-1・2）は、西側患者農園から見た家族舎棟全景と南側からの家族舎棟の南側拡大写真である。

写真13（楓-3）は、恵楓学園教室の撮影で、入所の子どもの写真である。正面立位・後姿の白衣の人物は 連続写真からして宮崎松記園長である。最前列左端の男子、その後ろ女子、最奥部女子は別ムービーにも姿が見える。なお、右奥の建物は別棟の屋外便所で、その後建物は3回ほど増築されている。

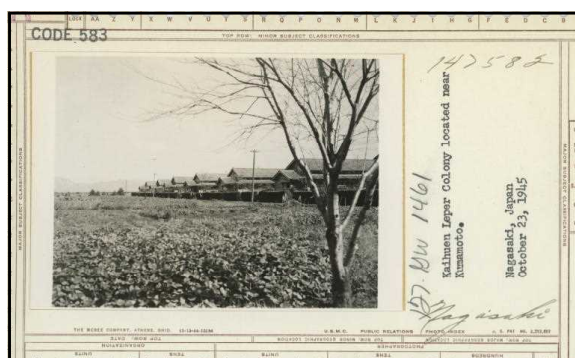


写真 1 1 家族舎棟の患者農園側からの遠景

写真 1 2 家族舎の全景

写真 1 3 恵楓学園教室の内部様子

写真 1 4 同教室での宮崎松記園長と米兵

#### (5) 健軍（熊本）飛行場

##### ①健軍（健軍）飛行場の概要

健軍飛行場は旧熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ-67）」試験飛行のための飛行場として設営された。

旧熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ-67）」試験飛行のための飛行場として設営された。

昭和19年4月「飛龍第一号機進空式」時には飛行場諸施設も南・西側に完成し、同6月大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和20年4月、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能が更に拡充する。昭和20年5月の義号作戦では、沖縄に向け「義烈空挺隊」の発進が当飛行場から行われた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊（陸軍重爆隊、その後は百十重爆撃隊と統合し、百七十戦隊に編制替）、第一七独立飛行隊、第五五飛行中隊、第一七四飛行場大隊の配備部隊名が記されている。

滑走路は、現日本赤十字熊本病院前道路として1500×60m（マカダム舗装）を基盤とし、さらに1500×300・1500×200mの2箇所を設定する。周辺誘導路としては、3000m長が20本設置され、周囲には500名収容の宿舍12棟と軍記録に記されている。



飛行場南部隣接の三菱熊本航空機製造所には、全長200mの第二組立工場が、陸上自衛隊西部方面総監部内補給支廠建物として現存し、義烈空挺隊慰霊碑も陸自施設内に移転されている。また、第六十戦隊の墜落機慰霊碑が大津町外牧畑、西原村宮山の2箇所に建立されている。

## ②撮影概要と接收状況

健軍飛行場の接收時写真は、各種飛行機15枚、各種機材・用品等16枚、焼却様子7枚、計38枚である。新発見は33枚となる。撮影は1945年10月4日・15日・23日・26日・11月20日である。16ミリ映像は一本が確認されている。

これまでの公開資料では、第一七〇戦隊の列機が金峰山系を背景に並んだ様子（健-20）、陸軍四式重爆撃機「飛龍」横シルエット（健-21）、飛龍機首部と機銃装備を装備し完全武装状況の様子、さらには接收機を集めガソリンをかけ焼却している様子等（健-3・4）が知られている。

写真15（健-1）は、飛行場東側での日本軍飛行機の列機撮影である。左列手前より一〇〇式輸送機、一〇〇式司令部偵察機、中央にも一〇〇式司令部偵察機が並ぶ。写真16（健1-12）は、尾翼に「大日航」「43」機首に社マークの描かれた大日本航空の民間機である。機体各所には白背景で緑十字が描かれている。マニラから飛来した平和特使機と説明される。機体は陸軍一〇〇式輸送機を民間に転用した「三菱MC-20」機である。長崎ケーブルメディア映像には、本緑十字旗百式輸送機と米軍ジープが映り込む映像もある。

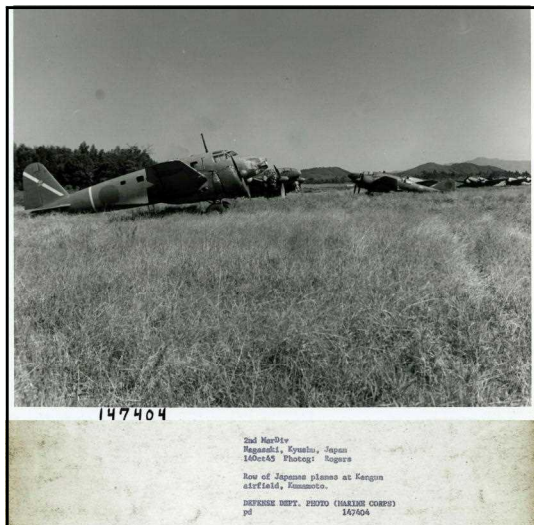


写真15 健軍飛行場での接收状況 遠景

写真16 緑十字マーク記載の民間輸送機

## (6) 三菱重工業熊本航空機製作所

### ①三菱重工業熊本航空機製作所の概要

1941年9月陸軍航空本部では三菱重工業に対し、大型機の月産50機生産の拡充命令を出した。1942年6月15日名古屋航空機製作所の最新配置図等を用い、熊本市近隣で最も敷地的にゆとりのある健軍に起工されたのが三菱重工業熊本航空機製作所である。

三菱重工業所内では機体を生産する第九製作所と称され、兵器等製造事業特別助成法による官設民営の工場として建設、略号「カミク」（官設・民営・熊本工場）とも呼称された。計画書によると主工場40万坪、飛行場100万坪、寮・社宅等厚生施設40万坪である。物資を搬出入する為に国鉄水前寺駅より工場まで専用鉄道軌道を敷設し、引き込み線から荷揚げされた部品等は南側の各種倉庫毎に管理された後は、二系列で北側の板金・機械・工機工場を経て部品組立工場へと進み、併設された健軍飛行場にある整備工場へと至り、ここで試験飛行、最終検査・引き渡しが行われた。当地での用地買収は陸軍が直営で行い、設計及び工事監督は三菱地所が、飛行場造営は西松組、工場建物は竹中組、厚生施設等は大林組が各々担当した。第一期工事（昭和17年度）では、工機工場・鍛金工場・機械工場・各種倉庫等並びに名古屋航空機製作所からの基幹工員等の社宅建設、昭和18年には青年学校の建設を行った。第二期工事（昭和18年度）では、部品組立工場・第一組立工場・木材工場・第一事務所等並びに職員や工員の社宅、厚生施設の建設が進められた。昭和19年には第二部品工場、不足倉庫の追加工事等が進められ、第〇図に示すように、総組立工場をはじ

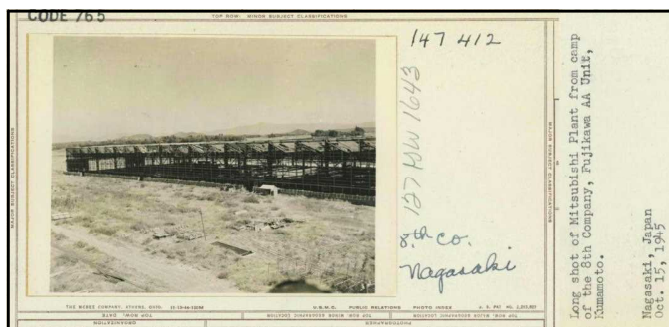


写真17 三菱熊本航空機製作所の第一組立総工場の全景

写真18 施設を防御していた高射砲接收状況



め必要に応じてまだまだ増設できる敷地だけは十分に確保されていた。また水道（健軍水源内地内の深井戸五基、集水井二基、汲上げポンプ三基、貯水槽等）施設の設置、電気ガス（九州電力・西部ガスによる施工）等の附帯施設建設も進められた1944年4月29日には、三菱名古屋で完成した機体一旦分解し、熊本に運び再度組み立てた四式重爆撃機「飛龍」（キ-六七）一号機の進空式が行われた。熊本製作所で敗戦までに46機（一部資料は42機）の飛龍が誕生した。なお、本工場は1945年5月頃より防諜上「報国熊第一〇一一工場」とも呼称された。

## ②撮影概要と接收状況

熊本航空機製作所の接收写真では、工場建物6枚、解体高射砲2枚の全8枚、新発見8枚である。映像・写真撮影ともに、10月15日である。

写真17（三-8）は、熊本航空機製作所建物の拡大で、建物規模的に最大建物である第一組立総工場と想定できる。現在、本建物は、陸上自衛隊健軍駐屯地健軍支処の整備工場として利用されている。写真18（三-3）は、三菱熊本航空機製作所及び健軍飛行場の近くの高射砲（AA.Guns）8門「8th Co Fujikawa AA Unit」である。3箇所あつた高射砲陣地（健軍神社高台・生協くまもと店舗後背高台・旧戸山外科裏高台）の砲の一部が集められる。砲身は既に取り外されている。

## （6）熊本駅・天使園・阿蘇登山・三角港爆弾等投棄 その他

第二弾として、熊本駅・天使園・阿蘇登山・三角港爆弾等投棄等を、令和4年12月に紹介する。ここでは代表的な写真の紹介に留める。

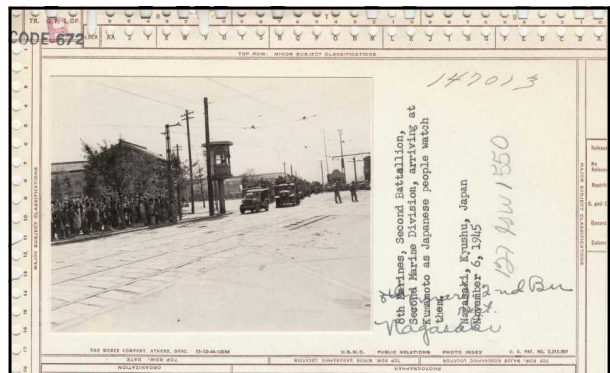
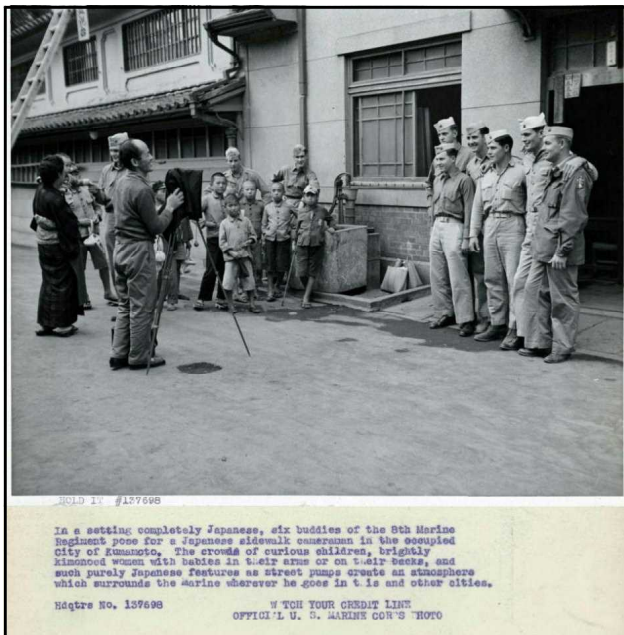


写真19（熊10-32） 敗戦後の熊本駅前の様子 1945年10月9日撮影

写真20（熊11-30） 熊本駅に到着した米第2海兵師団第8戦闘隊の様子 1945年11月6日撮影





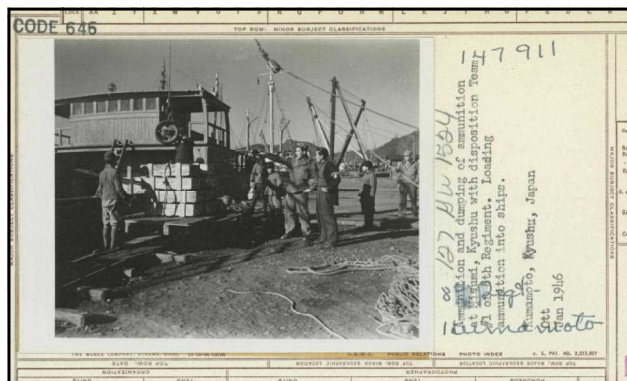
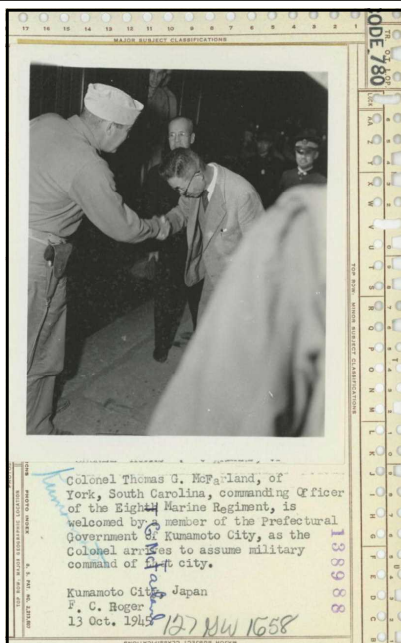


写真 2 1 (熊 1 0 - 1) 熊本の街中での米兵写真撮影  
 写真 2 2 (熊 1 0 - 2 8) 米軍駐屯地「キャンプ・ウッド」での星条旗掲揚。本書は、旧陸軍熊本幼年学校跡地  
 写真 2 3 (熊 1 0 - 1 2) 天使園での米兵と入所児たち  
 写真 2 4 (阿 - 1) 阿蘇湯之谷と進駐軍の保養地となった「阿蘇観光ホテル」  
 写真 2 5 (阿 - 5) 観光ホテル内での米兵の食事様子  
 写真 2 6 (熊 1 0 - 1 4) 熊本県幹部と進駐してきた第八連隊連隊長マックファーランド大佐との面談  
 写真 2 7 (角 - 5) 三角港での海上投棄の武器・爆弾等の船への積みこみ作業

## 5 まとめ

□一人ひとりが戦争遺跡・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として語り継ぐ

①戦争遺跡・遺産の調査、保存そして継承・活用

②戦争遺跡・遺産は、貴重な歴史資料として「国民共有の財産“文化財”」

③庶民の戦時資料の調査と継承は「地域協働の平和学」

④広島「被爆体験伝承者」、長崎「平和案内人」、沖縄ひめゆり平和祈念資料館「説明員」による「非当事者・非体験者」による語り、「戦争を知らない世代が戦争を語る」時代

□熊本の「血」と「智」、地域の特性を基にした「地」による継承のサイクル



問い合わせ先  
 市民グループ くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク  
 □〒865-0061 熊本県玉名市立願寺126-5  
 事務局・代表 高谷和生方  
 □携帯 090-1513-5528  
 □メールアドレス takayanagi912@yahoo.co.jp  
 □HP <https://kumamoto-senseki.net/>